

ケアリーバーおよびケアワーカーからみた「望まれるインケア」

A Study of Desired In-Care from the Perspective of Care Leavers and Caregivers

倉橋 幸彦 KURAHASHI Yukihiko

(教育学部)

細川 賢司 HOSOKAWA Kenji

(教育学部)

【要旨】

ケアリーバーとは、児童養護施設や里親家庭から退所し、社会的養育を離れた若者を指す。多くのケアリーバーは施設等を退所後、様々な生活上の困難に直面している。例えば、進学率が一般の若者と比較して低く、正規雇用率も低いことから経済的困難に直結している。また、退所後の支援体制が不十分であることから、ケアリーバーは社会的孤立に陥りやすく、メンタルヘルスへの影響が懸念されている。これらの背景から、ケアリーバーに対しては特に入所時からの支援の充実が社会的に求められている。

本研究の目的は、ケアリーバーとケアワーカー双方の視点に基づき、望まれるインケア（入所時における支援）のあり方を検討することである。倉橋・細川（2024）のスコوپingleレビューに基づき、ケアリーバーとケアワーカーに対し調査を行った先行研究を分析した結果、施設生活におけるルール、入所時に望まれる自立支援、ケアリーバーとケアワーカーの関わりという3つの側面に両者の認識の共通点あるいは相違点を見出すことができた。

まず、施設内のルールに関しては、ケアリーバーは規則の緩和や自由度の向上を求めており、ケアワーカーからも子どもたちの意思決定の機会を増やすという視点から肯定的な意見が見られた。次に、入所時に望まれる自立支援に関しては、ケアリーバーとケアワーカーの両者が経済面や生活全般、人間関係、心身の健康などに関する包括的な支援の重要性を認識していた。一方で、ケアリーバーからは退所後のより短期的な視点から意見が述べられていたのに対し、ケアワーカーからは自分の生き立ちと向き合うことなどを含めより長期的な視点から意見が述べられていた。最後に、ケアリーバーは信頼できるケアワーカーとの継続的な関係を望んでおり、ケアワーカーも退所後のサポートを行うことや、入所中に信頼関係を築くことの重要性を認識している。しかし、過酷な労働環境等の要因により、両者の関係を継続することが困難であることも窺えた。

以上のことから、望まれるインケアについてはケアリーバーとケアワーカーの双方が共通する意見や認識を持っていることが明らかになった。今後も、両者の視点を踏まえたさらなる調査研究や実践研究が求められる。

【キーワード】

ケアリーバー ケアワーカー インケア 子どもを軸とした支援

1. 緒言

ケアリーバーとは、里親家庭や児童養護施設を退所するなどして社会的養育から離れた者のことを指す。ケアリーバーの多くは心身ともに成熟する以前の18歳で入所施設からの退所を強いられることもあり、以下に示す様々な困難に直面するケースが多いことが分かっている。

1-1. ケアラーが自立後に直面する様々な困難

①進学や中退に関する問題

ケアラーの大学等への進学率は約20%と一般的な進学率と比べて非常に低い状況にあり、最終学歴は約80%が中学・高校卒業で、4年制大学卒業は2%、短大・専門学校卒業は10.6%にとどまっている¹⁾。また、ケアラーの中退率は17.5%であり、一般的な学生の中退率1.95%と比較して、10倍近く高いことが分かっている²⁾。

②就労および経済的困難の問題

ケアラーの正社員率は51.8%である一方、非正規雇用率は44.4%で、一般的な非正規雇用率が30%程度であることと比べれば、ケアラーの非正規雇用率は1.5倍ほど高い²⁻³⁾。またケアラーは就職後の離職率が高く、特に就職後3年目で約30%が離職しているという深刻な状況がある⁴⁾。そのため、十分な収入を安定的に得ることが困難であり、ケアラーの22.9%が赤字の収支を抱えている²⁾。この就労および経済的困難の問題の背景には、上述した進学や中退に関する問題が複雑に関係していると考えられている。

③住居確保に関する問題

就労および経済的な問題に関連して、ケアラーの約30%は住居費用を含む生活費に関する悩みを抱えている²⁾。イギリスではケアラーの約20%が自立後2年以内にホームレスになり、その約半数が失業状態にあることが示されている⁵⁾。日本でもホームレスを経験した11名のケアラーに聞き取り調査を行った谷口⁶⁾の研究があり、一度ホームレスの状態に陥ると、固定住所がないことや、社会的なつながりの喪失によって就職活動自体が困難となることが示されている。また現状では生活や就労の相談に対応する自立支援コーディネーターの配置が全国の自治体の35.6%にとどまっており、継続的な支援体制が不十分なことから問題が深刻化しやすい状況にあると言える²⁾。

④社会的孤立や人間関係に関する問題

ケアラーのアフターケア体制や消息を追跡する仕組みは未だ十分に整備されておらず、社会的に孤立するリスクが高い状況にあると言え、実際に10%以上のケアラーが孤独感を感じている²⁾。また、2020年に行われた初の全国調査²⁾では回答者がわずか14%であったこと、64.3%が住所不明や連絡拒否により追跡できなかったことが示されており、さらに永野・有村⁷⁾も退所後3年で約30%のケアラーが音信不通になることを指摘している。これらは、ケアラーの多くが自立後社会とのつながりを失っていることを示唆しており、彼らが生活困難に陥る原因の一旦であると考えられている。

⑤精神的健康（メンタルヘルス）に関する問題

これまで述べてきたケアラーが直面する様々な困難は、彼らのメンタルヘルスを蝕む。実際に、ケアラーの約30%が将来のことに不安を感じており、また約20%が人間関係のことで悩みを抱えている²⁾。また、ケアラーの63.7%が、生育環境に何らか

の問題（虐待・DV・貧困・保護者の精神疾患・ヤングケアラー等）を抱えており、既にメンタルヘルスの問題が発生している場合や、精神的に不安定になりやすい傾向があり、心理士による治療を必要とするケースがある⁸⁾。一方で、経済的な問題によってケアリーバーの20.4%が過去1年間に医療機関を受診できず、9%が施設などで受けていた治療が継続できないなどの状況もある²⁾。

厚生労働省によれば全国調査の対象者（2015～2020年）で本人記入調査を「案内していない・案内できない」理由のうち、30件が死去・自死であったことが報告されている²⁾。また中日新聞も中部9県の児童養護施設において、2015年以降少なくとも7人のケアリーバーが自死していることを記載している⁹⁾。

1-2. ケアリーバーに求められるケア

このように、ケアリーバーは身近に頼れる大人や家族がおらず、自立後の不安定な生活で孤立し、様々な困難や心理不安に陥るリスクが高い状況に置かれている。そのため、ケアリーバーの存在と彼らが直面する困難への認識を高め、段階的かつ継続的な支援を行うことが社会的に重要な課題となっている。

この段階的かつ継続的な支援に関しては、佐久間¹⁰⁾が施設養護における4つの局面（アドミッションケア、インケア、リビングケア、アフターケア）^{注)}を示しており、特に、インケアからアフターケアへの連続性をもった支援体制の実現が重要視されている。しかし、これまでケアリーバーを対象としたアフターケアに関する研究は比較的多いものの、退所後の生活の基盤を形成するためのインケアに注目した研究は少ない。

倉橋・細川¹¹⁾は、ケアリーバーの自立支援や生活困難に資するインケアについて調査した論文に関してスコopingレビューを行い、以下の知見を明らかにしている。第一に、ケアリーバーやケアワーカーを対象とした質問紙（アンケート）調査や聞き取り（インタビュー）調査が2007～2020年にかけて実施されていたが、研究数自体に増加傾向は見られなかった。第二に、調査内容は「これまでのインケアの実態を調査した研究」と、「これからのインケアの展望を調査した研究」に大別され、前者はさらに「ケアリーバーの社会的自立や生活困難に関連する要因を分析した研究」と「ケアリーバーがインケアを振り返り評価した研究」に分類された。しかし、倉橋・細川¹¹⁾では網羅的な調査によって今後のインケア研究の課題を明らかにすることを目的としていたため、ケアリーバーとケアワーカーの視点の違いを踏まえた調査内容に関する詳細な分析は不十分である。

そこで、本研究は倉橋・細川¹¹⁾でレビューされた論文について、ケアリーバーとケアワーカーの視点の違いに着目した追加的な分析を実施し、ケアリーバーの自立支援や生活困難の改善に資するインケア（望まれるインケア）について再検討を行った。

2. 方法

倉橋・細川¹¹⁾ではJ-STAGE および CiNii Research を検索エンジンとして使用し、“ケアリーバー” や “社会的養護経験者” などの検索語を使用することでケアリーバーに関する研究を網羅的に収集し、自立支援や生活困難の改善に寄与するという観点からインケアに関する調査を行った論文を選別している。その結果、14本の論文が採択されており、①調査対象、②調査方法、③調査時期、④調査内容の4項目について分析が行われている。

①調査対象についてはケアリーバーとケアワーカーに大別され、それぞれの視点が④調査内容に反映されている。本研究においては倉橋・細川（2024）でレビューされた14本の論文を対象とし、ケアリーバーとケアワーカーの視点の違いに着目して調査内容を再度分析し、望まれるインケアに関する検討を行った。なお、分析に関しては教育・福祉分野を専門とする大学教員2名が協議の上、合意を確認しながら進めた。

3. 結果及び考察

本研究では、倉橋・細川¹¹⁾でレビューされた14本の論文を対象に、ケアリーバーとケアワーカーの視点の違いに基づき、望まれるインケアについて分析を行った。その結果、次の3点について共通の認識あるいは認識の相違が見られた：1. 施設生活におけるルール（規則）について、2. 入所時の自立支援について、3. ケアリーバーとケアワーカーの関わりについて。

表1 ケアリーバーおよびケアワーカーから見た望まれるインケア

テーマ	ケアリーバーの視点	ケアワーカーの視点
施設生活におけるルール（規則）	消灯時間、インターネット利用、趣味や服装に関する規則の緩和を求めている。ルール設定に対する納得のいく説明や意見の尊重を要望している。	ルールの緩和を肯定し、意思決定の機会を増やすことを推奨している。また、ルールは子どもたちが自らの生活を作り上げる手段として重視している。
入所時に望まれる自立支援	経済的自立だけでなく、対人関係や日常生活に必要なスキルの習得など、包括的な支援を望んでいる。退所後の短期的な視点からの支援を求めている。	包括的な支援の必要性について認識しているが、ケアリーバーが自身の生い立ちと向き合いことなど、より長期的な視点から支援することが重要であると考えている。
ケアリーバーとケアワーカーとの関わり	情緒的な関わりを求める一方で、論理的な関わりも求めている。信頼できるケアワーカーとの長期的な関係を希望している。	入所中に築かれる信頼関係が退所後の生活をサポートする上で重要であると認識している。他方、過酷な労働環境から、関係性を継続することの難しさも感じている。

3-1. 施設生活におけるルール（規則）について

「職員へ望むこと」や「良い職員とは？」について退所児童（ケアリーバー）にアンケートを行った藤田¹²⁾の研究によれば、ケアリーバーから施設での暮らしやすさにつながる規則の緩和が望まれていた。同研究では入所児童に対するアンケートも行われており、

消灯時間やインターネット接続、パソコンやゲームなどの趣味、服装や髪形などのおしゃれに関する具体的な要望が挙げられていた。また、理不尽なルールの押し付けに対する不満や、ルールの作成における子どもの意見の尊重、ルールの遵守に対する納得いく説明への要望が見られた。

他方、「インケアにおいて子どもの自立を促すために必要な支援」についてケアワーカー（アフターケア相談員）にインタビューを行った梅谷¹³⁾の研究によれば、「ルールを減らした方がいいと思う（…中略…）自分の意思決定みたいな練習でもいいんじゃないかな」というように意思決定の機会を創出するためのルールの緩和を肯定する回答が見られた。また、「施設のルールとか、そういう規則、ルールとか当番を決めるのも全部子ども達だったんですよ。だから、要するに、生活を作るといふこと」というように、ルールを含め施設での暮らし・生活を子どもたちで構築していくことの重要性に関する語りも見られる。

したがって、施設生活におけるルールについては、ケアリーバーとケアワーカーとの間で必ずしも認識の相違や意見の対立が生じているわけではないことが窺えた。しかし、施設の秩序や子どもたちの安全を守るためには職員主導でのルール設定を余儀なくされる場面もあると考えられる。必要なことは、藤田¹²⁾も述べたようにルールを設定する際に子どもの意見を尊重すること、決まったルールの押しつけをしないこと、子どもの理解度に合わせて納得のいく説明をすることであろう。

3-2. 入所時に望まれる自立支援について

「入所中および退所後の自立支援の状況や要望」についてケアリーバーにインタビューを行った久保原¹⁴⁾の研究では、入所中の自立支援に対する要望として、一人暮らしのシミュレーションの充実や、対人コミュニケーションに関する指導が挙げられていた。また、入所中に望まれる自立支援に対する意見を直接聴取したわけではないものの、伊藤・高橋¹⁵⁾や櫻谷¹⁶⁾の研究でもケアリーバーが退所後に直面する具体的な困難として、経済面（借金や家賃等の支払い、金銭管理など）、生活全般（一般常識や手続き、家事など）、人間関係（職場での人間関係や異性とのトラブルなど）、心身の健康等に関する包括的な問題が挙げられている。

これに対し、梅谷¹³⁾は「インケアにおいて子どもの自立を促すために必要な支援」について、【日常生活の中で主体性が育まれる】、【必要な時に入所児童が自らの生い立ちを知ることができる】、【職員との信頼関係を築ける】、【退所後の生活や進路に役立つ知識、経験、つながりを得ることができる】の4つの観点から包括的に支援することが重要であると述べている。さらに、自立支援の必要性に関してケアリーバーとケアワーカーの両方にアンケート調査を行った佐久間¹⁰⁾の研究では、ケアリーバーが回答した「生活で必要と思われること」とケアワーカーが回答した「入所・在所中の支援」では、人間関係、生活管

理、スキル、精神的自立の4項目において大きな差は見られなかったことが示されている。

したがって、入所時に望まれる自立支援においては、包括的な自立支援が必要とされるという点でケアリーバーとケアワーカーの認識が一致しているといえる。なお、佐久間¹⁰⁾の調査における「施設（里親）にいる間に身につけておけばよかったこと」では、社会人としてのあいさつやマナーの習得、車の免許を含む資格の取得など、より短期的な視点から必要な自立支援の在り方が述べられていた。一方で、梅谷¹³⁾の調査における【必要な時に入所児童が自らの生い立ちを知ることができる】に見られるように、ケアワーカーは「いつかは向き合わなければいけない」過去との対峙を含めたより長期的な視点から必要な自立支援の在り方が述べられていた。

3-3. ケアリーバーとケアワーカーの関わりについて

既述した藤田¹²⁾の研究では、ケアリーバーからみた「良い職員の具体像」として「喜怒哀楽 感情表現がきちんとできる人」「親身になる 向き合ってくれる人」等、ケアワーカーとの情緒的なつながりを求められていた。また「平等・公平性がある 平等に関わる」「明確な意思を持っている人」といった記述もあり、年長者としての論理的な関わりも求められていた。さらに、「できるだけ長く続けて欲しいです」「簡単に辞めないで欲しい」といった声も聞かれ、退所後も継続されるケアワーカーとの長期的な関係が望まれている。

この点に関して、梅谷¹³⁾の研究でも、退所後のサポートがしやすい環境をつくるためには入所中に【職員との信頼関係を築ける】ことが重要であることを示している。また、佐久間の研究でも「入所中の職員との信頼関係が退所後のつながり」をつくることが後の生活に大きな影響を及ぼすため、「無条件でその子を肯定して」いくことの重要性が語られている。さらに、「(退所後) 実際にどのような支援を行っているのか」についてケアワーカーにインタビューを行った櫻谷¹⁶⁾の研究では「施設を巣立っていった人たちが、大人になってから子ども時代のことをふりかえり、話せる場があることは必要だと思う。そのためにも、職員が辞めずに、働き続けられる職場にする必要がある」といったことが語られている。

したがって、ケアリーバーおよびケアワーカーの双方がアフターケアを見据えた信頼関係の構築の重要性について認識していることが窺える。しかし、ケアリーバーからは職員自身の姿勢や態度、子どもへの関わり方に対する不満が聞かれたり、ケアワーカーが子どもの為を思っても子どもには理解されない場合もあるなど、現場では信頼関係の構築を阻害するジレンマが存在していることが指摘されている¹²⁾。さらに、「児童養護施設・乳児院職員の労働時間は宿直勤務を加えると全体平均の約1.8倍となる3,200時間/年に及ぶ⁶⁾というケアワーカーの過酷な労働環境も信頼関係の構築を阻害する要因の一つであろう。そのため、笹倉・井上¹⁷⁾の述べたように、今後も外部団体や地域社会との継続的な連携を

進めていくことが重要であろう。

3-4. 研究の限界

現状ではケアリーバーおよびケアワーカーに対し直接質問紙および聞き取り調査を行った研究が限られており、参照した文献が少ない。そのため本研究の結果について一般化するには注意が必要であり、今後も継続的な知見の蓄積が望まれる。

4. 結論

本研究は倉橋・細川¹¹⁾のスコーピングレビューに含まれた文献に依拠して、ケアリーバーおよびケアワーカーの双方の視点から望まれるインケアについて検討した。その結果、施設生活におけるルール（規則）について、入所時に望まれる自立支援について、ケアリーバーとケアワーカーの関わりについての3点に関して分析することが可能であった。また、この3点に関してはケアリーバーおよびケアワーカーが共通の認識を保持している可能性が示された。一方で、ケアされた者とケアする者の立場の違いから自立支援に対する視野の広さに相違が見られたり、労働環境の制約等によってケアリーバーが望む十分なケアが入所時に実現できていなかったりする可能性が示された。しかし、現状ではケアリーバーやケアワーカーに対し直接的な調査を行った研究が不足しており、今後も継続的な調査が必要である。

5. 後記

5-1. これまでの実践を振り返って

本研究の筆頭著者は、社会的養育の領域において23年間従事している。児童養護施設ケアワーカー、ファミリーホーム養育者、養育里親として、社会的養育の最前線で経験を積んできた。その中で、多くの子どもの養育に携わり、多くのケアリーバーと邂逅する中で、ケアリーバーとの思い出話にふけることがある。その際、社会的養育に従事している私と思うのは、彼らとのかかわりが感情的で場当たりのものであったこと、彼らの将来のためにとその時は思っている、彼らの本心はどこにあり、本当に望んで私の話を聞いていたか、セッション出来ていたかということである。多くの子どもたちは望んで社会的養育を受けているわけではなく、措置される場所を選択する機会にも恵まれなかった子どもたちである。近年「親ガチャ」という言葉が流行しているように、「社会的養育ガチャ」も存在するのである。嬉々として語るケアリーバーは決まってこう言う。「ここを出たら（この家・施設で育ったよさ）がわかる」。その言葉の背景には、今の生活実態が過去の社会的養育の上で成り立っているからであり、過去を美しく見せたいという感情もあるのだろう。

本研究では、倉橋・細川¹¹⁾のスコーピングレビューに基づき、ケアリーバーおよびケア

ワーカーの視点から望まれるインケアについて考察を行った。その結果、施設生活におけるルール、入所時に望まれる自立支援、ケアリーバーとケアワーカーの関わり方の3点について、両者の認識の一致が見られた。依拠した情報が限られているとはいえ、この「両者の認識の一致」は極めて重要であり、今後のインケアを考える上での貴重な情報である。緒言でも触れたが、ケアリーバーとの音信不通、ケアリーバーの生活困難、ケアリーバーの自死等、社会の片隅に追いやられ実態がつかめないケアリーバーの現状を忘れてはならない。しかし、現在公表されている実態調査は一部の地域に限られており、調査結果として反映されているケアリーバーの声は氷山の一角である。そのため、量的・質的なデータが不足しており、ケアリーバーの正確な実態把握の目途が立っていない状況である。

社会的養育のサービスは一律化されておらず、約8割のシェアを占める施設養護、残りの2割を占める家庭養護のどちらも、ケアワーカーないし里親家庭の養育者等が独善的に養育を行っているという印象が強い。また、「子どもの安全を守る」を枕詞として生活規則に子どもの意見が反映されにくい実態、労働環境の制約により十分な養育が実現されていないという危惧、さらに労働環境を守る施設管理者側のジレンマも感じている。したがって、今後の調査で得られた研究結果がどこまで反映されるのか、そもそも学術的に反映していくことが可能なのか、社会的養育に従事し研究者でもある筆者は一抹の不安を感じる。しかし、本研究では施設生活におけるルール、入所時に望まれる自立支援、ケアリーバーとケアワーカーの関わり方という3つの側面において両者の想いに一致が見られた。これはインケアにおける「子どもを軸に置いた支援」の重要性を示すものであり、この共通認識が今後の調査研究や実践研究の糸口になるのではないかと期待している。

5-2. 研究の展望について

今後は以下に示す2つの研究について進めていきたいと考えている。

①ケアワーカーを対象とした調査研究

多くの子どもを請け負い、「子どもを軸とした支援」を展開していくための基盤となる施設養護について、その実態を明らかにしていくことは必要不可欠である。しかし、上述のように施設養護の実態に関する情報は量的にも質的にも不足している。また、調査されていない未開の領域もあるように思われる。そこで、社会的養育を担う施設やファミリーホーム、里親家庭において、「子どもを軸とした支援」がどの程度実践可能かということについて、次の4つの内容に基づき調査を実施したい。

- 1) 養育環境、職員の就労状況、入所児童の生活形態、施設の運営状況
- 2) 職員の専門性を活かしたチーム養育の実践状況
- 3) 4つの施設養護^{注)}の実践状況
- 4) ケアニーズの高い子どもの養育と職員の疲弊感

入所児童を対象とした実態調査も実施したいと考えているが、多くの施設はマンパワー不

足に悩まされていると聞く。子どもたちに期待感を持たせることに危機感を持ってしまい、対応に苦慮することを懸念する施設については、この調査に関し回答を得られない可能性がある。しかし、現在の入所児童の声がどのようなものであるかは、「子どもを軸とした支援」の実現に向けて最も重要である。こちらは時宜を見て慎重に進めたい。

②「子どもを軸とした支援」の実践研究

ケアリーバーおよびケアワーカーからみた望ましいインケアは社会的養育を離れたのちの声を拾った結果である。実際には、現在の入所児童が将来的に起こりうる問題を想定し、より良いインケアを受けられる環境の構築につなげられるようにしていかなければならない。そのためにも、「子どもを軸とした支援」に関するケアワーカーの専門性向上に向けた研修を実施するとともに、その効果を測定・評価していく必要がある。そこで、著者が従事する施設養護、家庭養護を研究フィールドとして、上記の内容に関連した実践研究に取り組みたい。この実践研究を通じて、大規模研究では収集が難しいケアワーカーや里親家庭の養育者の深層心理に焦点を当てた詳細なデータを取得することや、現行制度における「子どもを軸とした支援」の実現可能性について様々な側面から議論を展開することが可能となるであろう。

これら①②の研究を通じて、より良い施設養護の実現に向けた具体的な方策・政策の提言につなげ、入所児童（将来的なケアリーバー）およびケアワーカーの双方が満足し、幸福な毎日過ごすことができる養育環境の構築を目指していきたい。

注記

社会的養育（施設養護）における4つの局面の概要について以下に示す。

- ①アドミッションケアは、施設入所前の支援を指し、子どもたちが新しい環境に対し円滑に適応できるよう施設の見学や宿泊体験や生活リズムの調整などが行われる。
- ②インケアは、入所中の日常生活や心身の健全な成長のための様々な支援であり、学習支援や進路指導など将来の自立に向けた基盤を築くための指導も行われる。
- ③リービングケアは、社会人生活への移行をスムーズにするため施設退所前に実施される支援であり、一人暮らしの練習、就職や進学に向けた準備が行われる。
- ④アフターケアは、施設退所後の継続的な支援を指し、生活や仕事の相談支援、定期的な連絡や訪問等、必要に応じた具体的な援助が行われる。

文献

- 1) 永野咲, 児童養護施設で生活する子どもの大学等進学に関する研究—児童養護施設生活経験者へのインタビュー調査から—, 社会福祉学, 52(4), 2012, 28-40.
- 2) 厚生労働省, 令和2年度子ども・子育て支援推進調査研究事業 児童養護施設等への入所措置や委託等が解除された者の実態把握に関する全国調査【報告書】, 2021.
- 3) 総務省統計局, 労働力調査(基本集計)2020年(令和2年)平均, 2021.
- 4) ブリッジフォースマイル, 全国児童養護施設 退所者トラッキング調査2023, 2023.

- 5) 上村千尋, 英国のリービングケアにおける支援の継続性—社会的養護を離れる若者の選択の権利と「つながり」の保障—. 立命館産業社会論集, 56(1), 2020, 49-61.
- 6) 谷口由希子, 社会的養護離脱後のホームレス経験に関する研究—子ども時代の貧困の観点から—. 人間文化研究, 25, 2016, 63-75.
- 7) 永野咲・有村大士, 社会的養護措置解除後の生活実態とデブリペーション—二次分析による仮説生成と一次データからの示唆—. 社会福祉学, 54(4), 2014, 28-40.
- 8) こども家庭庁, 令和5年度子ども・子育て支援等推進調査研究事業社会生活を円滑に営む上での困難を有する子ども・若者の実態等に関する調査研究報告書, 2024.
- 9) 中日新聞, 支えたい支えきれない養護施設職員負担と苦悩, 2023 (2/16朝刊).
- 10) 佐久間美智雄, 山形県における児童養護施設等の退所者支援に関する考察. 東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要, 5, 2015, 81-102.
- 11) 倉橋・細川, ケアリーバーの自立支援や生活困難の改善に資するインケアに関する文献レビュー. 名古屋芸術大学キャリアセンター紀要, 13, 2024, 121-130.
- 12) 藤田哲也, 児童養護施設での生活経験のある者からみた「よい職員」とは—入所児童と退所児童へのアンケート調査の結果から—. 金城学院大学論集 人文科学編, 8(2), 2012, 180-192.
- 13) 梅谷聡子, 子どもの自立を促す児童養護施設のインケアに関する考察—アフターケア相談員へのインタビュー調査から—. 同志社大学社会学会 評論・社会科学, 131, 2019, 95-121.
- 14) 久保原大, 児童養護施設退所者の人的ネットワーク形成—児童養護施設退所者の追跡調査より—. 社会学論考, 37, 2016, 1-28.
- 15) 伊藤嘉余子・高橋順一, 児童養護施設退所者の幸福度に影響する施設ケアに関する検証—施設退所者アンケート調査結果からの考察—. 社会問題研究, 68, 2019, 39-48.
- 16) 櫻谷真理子, 児童養護施設退所者へのアフターケアに関する研究—社会的自立を支えるための施設職員の役割を中心に—. 立命館産業社会論集, 49(4), 2014, 139-150.
- 17) 笹倉千佳弘・井上寿美, 外集団との関係からとらえた社会的養護の子どものエンパワメント実現に向けた支援—児童養護施設退所後の生活困難解消を視野に入れて—. 日本教育社会学会大会発表要旨集録, 67, 2015, 324-327.